

長時間ビデオ脳波モニタリングによりてんかん性スパズムが診断可能となった患児の一例

長時間ビデオ脳波モニタリングと筋電図の同時記録の重要性

◎山本 颯¹⁾、櫻井 銘子¹⁾、大澤 和彦¹⁾、三澤 成毅¹⁾、鈴木 皓晴²⁾、飯村 康司²⁾、菅野 秀宣²⁾、三井田 孝¹⁾
順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床検査部¹⁾、順天堂大学医学部附属順天堂医院 脳神経外科²⁾

【背景】てんかん治療は薬物治療を基本とするが、薬剤抵抗性てんかんに対しては外科的治療が検討される。特に小児の場合、神経発達予後の観点から適切な診断をもとにした早期の外科的治療が望まれる。長時間ビデオ脳波モニタリングは、昼夜持続で脳波とビデオを同時記録する検査であり、てんかんの発作型診断に有用とされている。小児のてんかん発作では、多岐にわたる発作型を正しく診断することが重要である。

【目的】結節性硬化症のてんかん患児に対し、長時間ビデオ脳波モニタリングを行い、筋電図の同時記録が適切な発作型診断に有用であった症例を経験したので報告する。

【症例】6歳女児。出生時より葉状白斑が認められ、1歳2ヶ月頃から強直発作や転倒発作が生じていた。当院小児科を受診され、結節性硬化症の診断に至った。てんかん発作に対して薬物治療を継続するも難治に経過し、外科的治療介入の方針となった。てんかん発作型を確認するため、長時間ビデオ脳波モニタリングにて四肢筋電図の同時記録を行った。

【結果】長時間ビデオ脳波モニタリングで、突然の頸部前屈・両上肢伸展の後に、四肢強直する発作を複数回捉えることができた。発作時脳波では、広汎性の速波・徐波の複合所見から全般性速波の持続へと進展する所見が認められ、筋電図では約1.7秒の筋収縮に引き続く筋放電の持続的増強が認められた。以上の所見から、発作型はてんかん性スパズムとそれに引き続く強直発作と診断した。

【考察】小児てんかんの発作型は多岐にわたるが、長時間脳波モニタリングと四肢筋電図の同時記録により、てんかん性スパズムとそれに続く強直反応が捉えられ、迅速な治療方針の決定が可能になったと考える。

【結語】筋電図は発作型の鑑別に有用であった。小児てんかんの発作型を正しく鑑別するためには、長時間ビデオ脳波モニタリングで四肢筋電図を同時記録することが重要であると考えられた。

連絡先：03-3813-3111（内線：5225）